

排除と包摂のあいいで

——L. ボルトンスキーにおける生むことと中絶の問題——

神奈川工科大学 小田切祐詞

【1. 目的】

近年、高度経済成長の終焉と福祉国家の危機を背景にして、とりわけ社会政策を指向する研究者の間で、社会的排除／包摂概念に注目が集まっている。概念規定の作業も進められており、社会的排除の全般的特徴、当該概念を支えるパラダイムや言説、隣接概念との異同等が検討されている。これらの研究が排除／包摂を二項対立的に捉える傾向があるのに対して、両者の複雑な絡み合いに注目する研究も存在する。だが、この種の研究は、包摂を介した排除に力点を置くものが多く、その逆について十分な検討が及んでいないと言え難い。そこで、本報告では、社会的排除／包摂の重層性という観点から社会的包摂概念それ自体の検討を試みる。

【2. 方法】

上記の目的を達成するために、本報告は、L. ボルトンスキー著『胎児の条件——生むことと中絶の社会学』（Boltanski 2004=2018）を分析対象として取り上げる。人間の社会的生成の問題を主題とするこの本の中で、ボルトンスキーは生むという行為を、「新たな人間存在が社会的世界に到来することに責任を負う行為」（Boltanski 2004=2018: 51）、あるいは「すでにそこで生きている人びとが住まい、死者の思い出が取りついている世界の中に位置を占めるようになる新たな人間存在をつくること」（Boltanski 2004=2018: 42）と定義している。この意味で理解される生むという行為を社会的排除／包摂という枠組みから分析することを通じて、本報告は、包摂が排除と織り成す複雑な様相の一端を明らかにしていく。

【3. 結果】

分析の結果、生むことが「肉として生むこと」と「ことばによって生むこと」に、中絶が「可能性としての中絶」と「実践としての中絶」にそれぞれ分類されることが明らかになる。また、「ことばによって生む」という行為が意味をもつためには、「可能性としての中絶」が生む過程に介在していなければならないことも明らかになる。

【4. 結論】

以上から、包摂としての生むことが必ずしも排除としての中絶と二項対立関係にあるわけではないことが主張される。また、中絶をめぐるこれまでの議論とは異なる形で、中絶が規範的に曖昧な位置を占めていることが主張される。

文献

Boltanski, Luc, 2004, *La condition fœtale: Une sociologie de l'engendrement et de l'avortement*. Paris: Gallimard. (= 2018, 小田切祐詞訳『胎児の条件——生むことと中絶の社会学』法政大学出版局.)

福原宏幸, 2007, 「社会的排除／包摂論の現在と展望——パラダイム・『言説』をめぐる議論を中心に」 福原宏幸編『社会的排除／包摂と社会政策』法律文化社, 11-39.

Luhmann, Niklas, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2009, 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会 1・2』法政大学出版局.)